

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

增本自來也説話

後編
貳

遠 13
1910
8



18
門
扉
卷

報仇自來也説話後編卷之三

武江 感和亭鬼武著



勇侶吉郎正輝搜自末也行衛併自末也權為海賊条
 儲且越後國推津國父を勇侶吉郎祖父父世の仇討立歸れふ
 よろく加恩あり源太郎の家名相續做させむひか西天草と自
 末也の手小預居る由りれども家の重寶權くも次血賊のさ小渡し
 おく夏他邦の國えも奈何あり一日侶吉郎を召是右の次等と
 申せしむ沙今より自末也の行浦を尋再び西天草取戻し
 立歸るべし昔命と蒙り侶吉郎畏て還小客路粧りて去られ
 美鳥も權一の別と告賣一個も相及鎌倉と志し越後の

美鳥も權一の別と告賣一個も相及鎌倉と志し越後の

國と立出まれば、倭の同國新浮の港より賈船東海を廻り鎌倉へ
 到るの便船あれば、這ふとあり日和辰春必定出帆をぞ倣ふあり
 りれされば鎌倉の邊ゆゑ自來也といふる盜賊徘徊するはしめて
 愈義嚴重なりけし自來也這夏成知りて小嘍を轉り商
 義に權く海賊とありて世上の動靜を窺ひんと暗小賊以
 諸處へ散乱し大船餘下船等と補裡相列三浦岬の沖に船を
 ろく沖行買船多しの荷物と掠め或時陸より諸所へ揆入ま
 り属域を罪小く世のまは窺りて廻間其身の親船みありて
 ちがふ、嘸てありけれ處にあつた暮小嘍も大半傳馬ぬふ
 打あり賈船やまゝと沖に遣出せし跡あり自來也一個ありて

か暴風のごとく風颯と吹送り海上荒く浪もしく峽雲一ひり此
 船の上ふを傳ひ掛て雲中お声ありて周馬實行と呼ぶを自來
 也蒿よ立ちあられず呼あ誰かやと尋ねば雲中よりいつく
 汝一回身退くといふも主恩如何心得とづれやとありけし自來也
 答へて當主暗君ありて人を知らずと故に諫め身退くといふも
 代々の大恩いづて主家死亡却せんと言の下よりちうあぶかし
 づん弔に當主の父三好長滋なれば應永の乱ふ石堂暗暎れ父
 暗正お先手を棄てて耻辱を請空しく生害倣へば遺恨は今
 小石堂家お残れども當主長房武お疎く憑甲斐りて暗將なれ
 む汝予存念を受継當主暗暎より一回石堂家お仇を報ひ



自来也系故
命之圖

予がら流を安んずありしは公底見届け且つ這一大事な憑り
とびより寛行呼と計り篙小低頭ると中雲暗流り浪穏小靜
と小賊もハ一艘の船下船し若き男女の死骸と取ふ親船の
先小漕ませ我沖波窺ふ処即今の暴風おほれ此二個の乗居
た小転轉り海底小沈と漂ふ所祐中人と船を遭寄惹撞りの
とも多く水と食をえん如斯溺死做し候ふ時刻不遇ふあれど
天晴首領の術もあふ命と救ひ得させんと船小取入しほりしと
流石小人小鬼もあふ語を聞き自來也ハ兩個の死骸取看れし
心で蒼の美女美男瓜端尋常さほあれハ不便小おひより
某祐ひせん大船小拘へ入る兼く所持ある西天神の包と以

兩個の死骸を撫回と少を忽教外の水吐出眼を睜開る小賊も
と打あつてさばぐ介抱あると程小遠ふ兩個甦生しけれハ今不
始西天草の奇特こそ不審れ斯く兩個の男女甦了めれハ自來
也ありし次序と語り復二個の動靜承すに那漢子と活命の
恩を謝し誰人か不存ども我の命を救ひある洪恩
不隱子細説話し某々石堂暗暎の家臣吾川采男といふ者
るが前の日江の鳴流つでの過往不圖も這かれ女と契り結ひ
さやひを近邊の盜者ともて処ら喧嘩を仕掛られ詮じあ
其者とも討く捨其場より立退れども陸地ハ追人のすあを
懼き海辺ふありあふ小船ふより三浦の邊へ落行人と此海

上へ乗出せし處に卒の大風原未不馴も業あれば船漕ぐも
 らぬ不任せしと遂に船も轉り溺死做しけりしなり亦此女を同
 藩中より万里野破魔之助と申す者之妹と名をいしけり
 詳に取れ自來也何想ひらん江の邊を取先程より春を觀
 ほと艶なれ容貌今より予が園中の伽を做せしと采男と申
 らんと命替り予は船中の炊まりも勤むべしと固く呆る西
 個始め小嘸嘖等も茲に女小公不移首領の如何ある意より
 むひしと合眼しとぞ私言れ采男の口惜とありひるが自來也
 向ひ品およりてハ女も妾不進せ予も下人とも成を死が先足下の名
 と如何と尋しと自來也呵とと嘆ひ品おより及びと否應れ言も

木到今より女の予が妾諸言吐ハ女の帝今踏殺さん某誰と想ふ
 實名の尾形周馬寛行を多々自來也といハ盜賊の首領斯名采
 らハ屬賊とならば其通不マといりまゝ歸らぬ囊の鼠返答の一言
 ハ生死の境と照臨且ハ采男の怒りの顔對と做盜賊自來也といつ
 かとい園捨つらぬ恩仇是語せしありありの技撃手ハ真向丁と
 切跟と西天州と所持做しなれ不ト死の自來也申すもせば白
 及挫取腕し伸采男と握らぬ篙へ去出し予ハ及向ふその小路
 洪等能ふ討へと言の下より小賊とも始の情延替り手捕足捕周捨
 る非刀の采男と宙に惹撞海へ遠不投込り茲と入るる江
 と呼し叫び魂をぬく氣絶せし自來也小脇ハ延拘へ船底ハ

あそ入ふちれ

勇侶吉郎於鹿嶋沖逢難風併自來也劫賈船而

于侶吉郎爲對面奈

去程亦勇侶吉郎ハ新海の港より賈船ふりて東海を巡り鎌倉へと船不慮不常陸の國鹿嶋の遠沖と見えしに邊りゆく卒に大風吹起り海上一面黒と流せりて高波船槽を打越既中搏らんと思ふれば糸組の者ども髪を切水神へ誓をかり棹とさう折碇を打込杯しし茫々たる漸く半炁風靜了何國の沖もあはれ夜中吹流しゆく處小遣の沖に火の光と見えしに遠を目當り揮て直一舟を跟ふと茲と看み多くれ小船潜るるに船と取囲は

頓々大勢を前後將下の船へ荷物と運べば始のむら助船はせれやとさうまふたはあしと逃くみ奮ひたり潜行動靜とせし糸組の商人ども這者何所へ運送るとやと思ふれば口ふりて我と海賊に渡せと做さるのぞ命惜くは荷物残らざ渡せど最前火の光りを見せりも此所へ偽引出さん計畧なりと聞より糸組一同不悪く海賊荷物と不遣と争へば盜賊どもハ腰刀惹抜切立ち夜中といふ空掻曇り火の光もあつね船中ゆく糸組立ち小噪動ると延小侶吉郎ハ原めより海賊と見えしに調度を做し高舟斬出あつれを伴ひ圍撃し盜賊どもと切散し海へ切込衝くらら夜少見と明渡り風靜了と雲暗しと回僅小隔と沖



しんきしろう
侶吉郎逢
しらひやにめ
自來也廻
之圖

自來也説話後編卷之二

自來也説話後編卷之二

かへし大船より勇侶吉郎あつたや必を速流走られ小賊
 どもを權く扣へよと声を掛く立出る自來也をみるよりも侶吉は
 大に欣悦還ふ小船より移り那社のえへ漕寄跳上り一別以
 来の情を伸自來也の大息を謝し泪が流せば自來也も涙を交
 して對面み歎び笑むの事も語り合俱ふ泪と催せし自
 來也いつく今何用あつたかの賈船ふふ合此所へ到りしぞ
 と尋ぬふ侶吉泪を拂ひされむ其とては這回某國に立出
 と斯のごとくの動靜あつれば西天竺を推津家へ返り玉りんを
 ありけし自來也も有枝有葉を因取るべし考へつて前ふ
 もせしごとく早が想ふ子細あれは今とて予も預られ

ざり某が望むも半年の中よ調へんと想ひけむ其樹ふ
 至り汝も渡らんけりるが西天竺と不接へ汝國に立歸るの志は
 あるはどけし今半年の間予も巡り過るとおぼし其中ハ予が方
 止むがし帝今返りあつたれ動靜と遠く語りやんとある侶
 侶吉も自來也の言否もあつたれとあつたれ某も權く足を止
 め申さんと諾しちるが自來也もつて汝今一同ふふ組
 來れ賈船の者ども不便あり想ひられと此はふ祐歸りなれば
 海賊の住所を注進せんは定なれ一個も残らざりて生て歸らん事
 難うべしと予も侶吉のいつくは身の在處那者どもものには
 死ななんとの疑ひ尤もあつたれ今何の幸もあらず殊に某

越後より乗合られ者ども故一八不便不存さればならうまふ付
らば一命ハ饒一ふくもせしむと自來也頭と振大事ハ小直とを
起て蟻の一穴堤を崩との緞令倭の志乞憐ふ延とんハ大丈夫れ
所為ふあんと看よく帝今那恥を許へしとてとて手あ印を
結びは不呪文と唱へつ切拂ふとてとて卒ハ大風吹起し荒波
立ち那船を震あけ長下四双浪槽と打越あやとてとて忽
み那大船を碎散り乗合人ハ一個も不残底の藻屑と沈じしハ
長直ひりり光景なり茲自來也の奇術ふく己とが船と忌
び浪平ハ不風納アいと長余なれ快晴ふありとてとて

援嶋金吾救吾川采男併金吾女兒贖身而祐吾川糸

馬小相列三浦の岬ハ近來住る傳兵衛といわれ獵師ありとて
一日例のごとく小船より乗沖ハ漕出網取下し魚獲と做せふハ
投必細小何ヤん意掛てわらぬ網の損せん夏と懼と僻静ハ
這を延上るればしとて半死なれ漢子の水ハ瀕し動靜たれ
と驚れながら船ハ延擡とてとて介拘まし水を吐せ用意の藥
取与へたしして衛人公地附ちれば我家ハ伴ハ何國の人と尋
ね不郡漢子傳兵衛の實意とてとて扇笏の上ハ始終と説語吾川
采男といつるりのしと名乗られハ侍兵衛とてとて驚とて手と托て云
らく元某と尊父ハ仕へし若黨援嶋金吾とせし者あり
君いふと三歳の頃侍女留とてとて女と密通露頭の上暇あり

那女そのにょの在所そのところ這こたれ之これ浦うら不到たつた了一个ひとつの女兒むすめを設たてけ留とどめ産後うぶご不
 才さいなり當時とうじ十七しち才さいの女兒むすめと某たれ二個ふたご困窮こんきゆうの立たち氣きも遍まり魚うしほ
 獵あげ業わざし其日そのひを送おくりけりも古主こしうの尊ごん見けん子こ斯する難あた義ぎと在あり
 先まに家いへ小足こあしを傳つたへ心こころ置おかなく保たもつ養やしやうあふべしといいと懇こん懇こん
 款待くわんたいわれハ采男さいなんも稱なづけろ落おち着きろが兩度りやうどの水難みづがたも身み躰たい勞らうれ
 逐おか小痛せうたうめを延ひびり十じゆ九く一生いつしやう小煩せうぼんひけりハ傳兵衛でんべゑハ素すより女むすめ兒
 簍すも懇こん切せつ小春病せうはるびやう做しよし薬用油やくようあぶら断つわられも其驗そのまかもてもあ
 日ひ毎ごと小重せうぢゆうれよまのハ親おや子こハ悲かなしと醫い師しも取替とりか眼まなこ藥くすり忌いら
 ざりけり一日いちにち醫い師し容よう躰たいと看みろけり今いまハ此この人ひとの病びやうハ甚い重ぢゆうなり
 獨ひとり參ま湯ゆを不ふ用ようと平へい愈ゆの程ほど足あ東あづまなりとありけり是こゝにこゝににれり
 はれ病人びやうじんハ快氣くわいき做しよしめたりと醫い師しを歸かへし後のち親おや子こ商義しやうぎは
 ちこれハ予われ今いま貧ひん若わ小通せうとうり其日そのひとた小送せうそうり兼かれ身みあくるの程ほどと
 奥おく痛いたも歇しやくと金かねのち當あたりもあられハ今いま采男さいなんとのふと人ひと參まと
 求もとむと難がたしあありとて眼がん前ぜん主しゆ人にんの大たい病びやう着ちやく殺ころしせんハ臣しんの道みち
 おあつと從したがひ予われ一命いちめい小換せうかりとも祐進すけしんらせり想おもふあれば何なにとぞ
 金子かねこ也なり之これの手段しゆけんもあつとほりやと歎なげきけりハ簍すも泪なみだをのりし
 いつとく妾めかけ漢かん子こもあつとづつハ父上ちちのうへの助すけとなりけり事こともありせんハ何なに
 瓜うりつとちもあつと甲斐かういリ死し女むすめの身みあつと如何いかとも金子かねこ也なり之これの僕たく
 む一ひと齋さい此この山やまと不ふ束たるる吾われ身みあつとづつハ護ごの碎銀さいぎんもなかりと
 らハ何地なにぢへなりとも身みを贖あがひ浮川うきがわ竹たけの流ながはしの身みも做しよし人ひと參ま

自來世言後編卷之二
 十

宋男病
金吾親子
看病之圖



代としく主人の病苦を救ひむられしとありわれは侍も大お
 歎と悲しび世の諺も四百四病の疾ふし貧程憂死のほしと
 之とも這者大切な主人の病ふ身と苦しみ且その上お我れ
 貧の病ひも重りれば今更如何とも詮ふべからず主人の爲
 みの妻子の命も換は様一あれは權一の同汝君傾城少を沈
 主人を救ひ進らせよ貧なれむこそ帝一個の汝の身と賣せん
 こそ口惜く本意あふねど難面親と恨ふが怨め主人の大事
 かつれどと男泣お伏し沈む勿躰なれ父の命せ藁の上より
 父上の命も成長一の恩も報ひも中とぞはけ方の助となれ
 夏なると不孝の此身用立ともけりら娼妓の愚何れらの憂死
 辛苦も厭ふはじ老早亡八へ懺令く一刻も疾く薬と調くむつれ
 ぶしと女兒の諫め侍も公とり直し今指當りて外詮
 とぶわぶられハ予ハこれより近邊りお大磯の曲輪の者あり
 あるよ一あれハ耶所お到り其筋の人よ渡り合はれおの上馬入と
 泣く我家と立おられ跡お女兒と越方を想ひはぶくとさぐくと
 一個とら悲しひ伏轉びくくく且説く世の中お妾など薄命
 かりりのハおどし生とをぐつお母上お後と爺夫のよめて生立と
 邊りれ女兒とてつ見夏と結る髪象誰おと同くハ母人の取
 擡おふとすおつり妾も母の在りなハ髪や容象も纏いと貴や
 りのと假顔やと明暮暮も母上を親子一世の死別と復且了

父上ちちうへも生別なまわか且かつ做悲しやうひ一ひとの神かみも佛ほとけも我われをもと捨すててとふふは
 媚まへと独歎ひとりなげとくありけれが衛まもふ顔かほと上我かみわれなつと未練まゐなり假かり
 初はつも士しの家いへふ生なまと一ひとの身みを持もち主人しゆじんの鳥とりの憂うれ動どうも歎なげく思おも
 痴ちの至いたりごとと意いみ公こうより直ちか一ひと父上ちちうへの帰かへりもも權けん一ひとの間まもあり
 かんふ薬温くすりぬるめすのせんと泣目なみを拭ぬぐふ折やとあれ主侍しゆじを清先きよさきふ
 立大磯たちおほいそ千歳屋せんさいやの主人しゆじん長助ちやうすけ媒まへと同所どうじよの無頼むらい者もの蝮へびの銅八どうはち三個
 打連轎うちれんぎやうと表あはふ待まちせ置内おきうちふ入いりて女むすめ兒こを能よくく打うちつる長助ちやうすけ銅八どうはち
 私言しりごと合あつ共術ともじゆつを外そとへ呼よびて彼此たがひ商義しやうぎ調しらひく五年ごねんの年季ねんきを
 金五拾兩かねごじゆりやうふ證文しやうもん取極とめられ傳兵衛でんべゑこの言ことと女むすめ兒こ箒はらひふ説話せつわふ
 ぞ女むすめ兒こ半はん貞ぢやうも不ふ惡ご顔かほ泪なみだを押おす身み仕し無む做して運うべ轎ぎやうのり
 移うつて釜かま下くだせと流なが連れんふ熬あ煎せん兼か父上ちちうへ真成まじやうふ坐ます一ひとの黠あつ也なりと一言ひとこと
 を別わかれの泪なみだ千歳屋せんさいやの金子かねこを渡わたし輪りんふ添そ大磯おほいそにこと急いそに
 行侍ゆきじを清きよへさす丁ていむり暮あひ行ゆき後影ごかげふおくりと忽たちまち地上ちやうじやうふ倒たふ
 伏ふ忍しのくし溜なみだ泪なみだ女むすめ兒こ堪た忍しのく一ひとの吳ごよと呼よびとばりお泣な叫ながも理ことわり
 とこそあふれされ見外よその衣あひも空吹風そらやぶかぜと銅八どうはちの此こゝお到いたり侍じを清きよ
 を延起ひきおこし互たがひひお覺さ悟ごの上うへなれは泣なく今更いまさら詮せんとふはし借かり口くち入い
 の金子かねこれ分ぶん口くち去未きよま接せんとありされば傳兵衛でんべゑも泪なみだを拂ぬぐひ段たんと
 足下あしもとの世話せわ僅わずかなつと謝礼しやうれいとと金三兩かねさんりやうふめれハ銅八どうはちを去返きよかへし
 斯計すけいの端金はなかね接せく何なんうせん約やくせしと二十金にじゆかふ人ひとよ必かならと抵頼たいらい
 言ことなつれと寢徒よみだかれは侍じを清きよも情なさけなり這こ者もの不法ふはうなる漢子まんにし哉なり

移うつて釜かま下くだせと流なが連れんふ熬あ煎せん兼か父上ちちうへ真成まじやうふ坐ます一ひとの黠あつ也なりと一言ひとこと
 を別わかれの泪なみだ千歳屋せんさいやの金子かねこを渡わたし輪りんふ添そ大磯おほいそにこと急いそに
 行侍ゆきじを清きよへさす丁ていむり暮あひ行ゆき後影ごかげふおくりと忽たちまち地上ちやうじやうふ倒たふ
 伏ふ忍しのくし溜なみだ泪なみだ女むすめ兒こ堪た忍しのく一ひとの吳ごよと呼よびとばりお泣な叫ながも理ことわり
 とこそあふれされ見外よその衣あひも空吹風そらやぶかぜと銅八どうはちの此こゝお到いたり侍じを清きよ
 を延起ひきおこし互たがひひお覺さ悟ごの上うへなれは泣なく今更いまさら詮せんとふはし借かり口くち入い
 の金子かねこれ分ぶん口くち去未きよま接せんとありされば傳兵衛でんべゑも泪なみだを拂ぬぐひ段たんと
 足下あしもとの世話せわ僅わずかなつと謝礼しやうれいとと金三兩かねさんりやうふめれハ銅八どうはちを去返きよかへし
 斯計すけいの端金はなかね接せく何なんうせん約やくせしと二十金にじゆかふ人ひとよ必かならと抵頼たいらい
 言ことなつれと寢徒よみだかれは侍じを清きよも情なさけなり這こ者もの不法ふはうなる漢子まんにし哉なり

媒人こそ憑けと何日二十金授んと諾ひしや予身おほく
 たりと言を發ら家お帰らんと做と處と銅八ハ脊後より傳
 の髪柄捕り顛倒お惹倒し自鼻も不分打擲を懷中此金子
 延出し奪ひ取り逸散お逃行と傳兵衛を衝く起立盜
 賊よ遁しハヤビ人しお合ひおられと呼われも寂莫と
 鄙道前後の家も隔れお訪る人もおたれお前目のかこ
 より深編笠お面と躲せし士一個此路程へおのりしが斯と
 看より走り走来る銅八と捕り去跟金賤布を奪ひ返し追
 跑めれ傳多清お夫とあつ疾行と言お傳兵衛押し寄り
 編笠の中半面礼もとと病人も氣遣しと我家とに
 走り其間お銅八起より臍何故肩持とと那士お跳蹴と
 手練の中身お洞ハ眼お惹眼倒しと觀向もやとと僻靜と
 見捨り過行士ハ一曲ありととととと

朝妻歌之助到大磯曲輪併侶吉郎与歌之助娼妓
 買論之条

頃者相州大磯小磯化粧坂ハ遊女街麗を並べ鎌倉以にじぬ
 近郷の浮男鬱氣を散ゆるの曲輪あり夜毎日こしお鼓采
 たり中おも大磯の千歳屋と因へ娼家ハ建文の頃より
 續々れ大家おくせありりるちるお援鳴金吾の女兒養ハ此
 家お身と賣るも代衣とありなり新妓の抱女となり作り

器量勝ど公も優しく伶俐生れられば昼夜客の役間も
 あく今此曲輪不全盛肩を双ぶりのなれ情知あく張漁く傾
 國の粧ひは客これが鳥ふく海を奪はし魂を失ふりの後とぞ
 此小先年越後國吳賢邑あく五十嵐曲膳と武術を試こも
 られとより其場より逃去し朝妻歌之助業父の夫より何國を
 経巡り尋ねるあや復亦武術歌修行と号し近日大磯曲輪へ
 到りしが不図代衣の容色ふ公迷ひ一夜の情成赤人と例の否
 等風俗あく編笠眉深ふらら被り井筒とつれ揚屋を以て
 此夏と言遣と折柄勇侶吉郎も權し此邊あつと此はと醫
 氣のあつり大磯の曲輪ふあつり那代衣と求りんと同く巴と

りの揚屋より中へ迎ふも編笠打かぐり十歳屋あかんと
 せる時歌之助も爰小到り表にうく互ひ不行産し歌之助
 小附添ふあつり井筒屋繁藏とつるりの遠夏を知りて代衣
 衣を我方の容ふ惹眼んと想ひとふれが巴屋の挑灯を支へ傳
 代衣大夫ハ此方先約ひれ其許の貴安を後より延連の人
 とあつりけしむ侶吉郎小従ひし巴屋常吉といつるのみし侶吉と
 代衣の容あせんと思ふあつる処をれば答へつる先後と
 とゆれ金銀とつる未の姫妓女交りしと貴客を待せあと
 より揚り言あつらんやと前へ進むが繁藏抱掖其方の貴客
 而己金銀と遣ふとあつらん心窩悪大尽風取除兵とてと

自筆せし言言後傳卷之三

十五六

うんせしとせしと常吉も延戻し己が双方拳と擡撃合ひたん
 とくくけしとば侶吉歌之助声と共く遠と制し歌之助のつづく
 決連強く年少不及々と大坐不到て唱妓小對面の上何と成
 と靡く靡く代衣の意ふあつとと予のすこ金の時も
 許多ふられば費も不厭風流とのと歌が身中あれハ旁浪士
 の黄金ふ乏しく一夜と争ひ求むの族不非婦人のく終ふ
 んと平少ふ足あれば先小人との予と不傳くせ進くを
 よく己と悟る言の傍小侶吉も心中半負憤りくれハ常吉
 あつとく平那拵女小意を寄とるおもあつと此ほどは
 かな白痴の大言不圖捨も意氣地の曲輪一の慰とたれば

代衣と中人と是非予對方と做金銀と面と張との
 あつと予も俱あ流魂となりと金と出傾城白痴りとも
 子辯氣の友とあつと予んとあつとれ言を歌之物因替り白痴れ
 流魂のと予と指罵とのや士小似合ぬ當言吐へより扱
 直し小言とれや但一某と懼しと想つ故く看れと通れ
 優漢子素より武術の得くけしと十分億も多ひとと重なり
 廣言侶吉も歌之助ふじつに見外又小比つと不言因ハ故
 忍怖く腰や抜んと當言小因せつ直あつとあつと云々人當今
 中せ白痴と外ふもあつと足下の夏斯云發つとくのは
 其俗も難止か入去つと腰抜武士の腰刀も抜くとと

能くはしと朝言ふ歌之助那此と言戦の無益の論とわん
より此上を代衣と為共の對方わや一請人若引か曲輪
外の堤不到と腰劔ふつて接へとありれば侶吉も打嘆の
汝等こゝれと對手まかるとも司一痴漢の名を取ふ似れぬ
斯云掛れも武道の意地去未隄とく同道せんと今と互ひお
身纏ひ驚破支とそ生まぬと看る處不斯とすけり千歳屋
より代衣の僻静お立いで二個の中よ分入とくは後と委
故不歴の勇方、断併かりんは刀の面前とんぞんふと
妾がす取ふ何わどく氣の毒おとすけり数とくは此手
権の中妾不預けおられし復との経の斯く不束とくは

と揚詰の客人とくは帝今何ととも答へずしせん直も難
を先く大坐へ入と一献取汲とて代衣が扱ひお双方すに
公も解あうあは予くか武道も立ち恥辱ととくぬ其許の捌を
権一待やうんと言取はが以兩個を千歳の大坐へうち通りぬ
且説吾川采男の猿鳴金吾の情あや女児の刃れ代を以て茶
用急とて親子の滅心届はしおや九死一生れ病お漸く全快做一人
采代お通り女児お責とれ事ども始めく岡太ひお警と金吾も
厚く礼お速女児篋をも曲輪へ尋と謝せんとく大磯千歳室かり
ふ到り代衣お對面做とれば代衣も采男の快氣せしを放躍
此うへと采男も金子を調へ代衣の身結とて因や報りんを

ありけしき衣のしつとく此程もく寛大盡と結く安の妻
と揚詰もく大坐の酒の舞の對手と做しとくしが近來の身清し
く何所へ旅も遣一呉もやとことなれば此人を憑身侶ふもなり付
らへんほかたきと公の男しうのたきと怨の酒肴と出敷待らぬ
の客人待詰るう追しお呼ぶも先と這お止すりうの後刻寛
説話うへんと代衣と奥へ入りし跡の采男の熟く二越方とるひ
おせび汀の行詰も奈何なりしや心二拭て何卒此入盗賊自來也
け在所を恥と見届搦捕人と想うらち奥の噪の大陪侍なりけし
何公なり戸の透間より半面看くあれが牽頭持くへく敷
の人居並び正面の悠然と安座做一犬盃次扱くる那大盡と

くこれ客を能くう飛跟観くあれ這正く前か之浦の沖か
出達くこれ盗賊自來也たがひわらざれば大お欣悦還お踏く切
うへんと想ひく復老くも汀の行詰も官を殊く多勢の中へ
予一個切アへくして渠を生捕まもかてしとを不如這事所の縣
吏お訟へ多勢と以く搦捕人と暗に此家と立出縣令廳へ走
行ぬ諸且朝妻歌之助へ向齒及くこれ猿眼の醜と前髪より
勇侶吉野へ人品勇くは立端の士かんれどもけ衣も想うるや
みや何きともいふと答へのおしづれど兩個の投疾如何と侍處
み代衣より玉章と以く兩個へ贈るくしつとく今日まへへ
立女揚詰の身おけくも明日より身おけくもなりうとて入去

ながく御両個一所に迎へはひせんこともかこちれば、圍取もく
 一日代み通ひむらぶしあつあれ時の底も討り知り何れ
 へる深情の方へ塵をばけん夫々く大坐而已動き意も汲せぬ
 してありけし、斯のごとく上も今宵のあめせ首尾悪けしと
 明日井筒屋巴屋圍取何れとも極置をし今宵も我く
 立歸らん歌之助侶吉も揚屋く小言合千歳がく立
 出く有く丸へ引行あくる自來也み従ひまされ牽頭持
 とすべめるへ衆皆小嘍喰の者どもなりけり先切り歌之助
 の動靜や、或れや樂がはより多く金子賄へおれし一回く
 せしを同取却者の帰路も待請けり捨金子と奪ひにけり

嗜金とせんと思へども、渠自武藝勝且一廣言も發する一兩個
 わくはえ朱がし衆皆まれし小賊ども自來也み、這を躲し
 首領一個残り置歌之助の後を慕ふく追跑行疾夜も三更の
 頃、おひ吾川采男案内にし先立捕手の吏職數十人大
 門の門さうせ出口く、固め盜賊の首領自來也み活捉んとす
 氣屋を取圍と番手と定め込入るあぞ自來也み熟睡くあり
 けられ斯とくより跳上り進む捕手、二三個捕く去退け
 采男おしりく、汝前み海底に沈失しと思ひしが如何と再ひ
 此に到りしや復汝が延連くれ女を予が方止めし故那も、孰
 公残り意恨あれ予がれ訟えしとぞ、それと十重比重し取



自來世言傳備卷之三

自來世言傳備卷之三

いひのち
 秋えぬ
 ぎきまに
 連賊冠番

ほうりしゆふも剣の術もそへあれが商しお勝れ足下の生
 根洞不動く足擺振る大穴夫の魂俤し我等も修行のくわ衆
 言一同お切掛らんと對手と做す玉のれと朝アなつて腰劔拔持
 牙據われハ歌之助ハ呼と叫び躡る大北一房居し悲しん声
 音張あげくやよ待あ人しよ予と卒介お持病の痲癩發
 てふれべ真劔勝負ハ饒しく愈々其代あ懐中の金子も衣
 服もあぶりと賤布とり出し詫るあぞ小賊も案れ外ハこれ
 億病者と呆とむのり衣服剥取金賤布を延出し改め觀
 小纏子金三兩ありわれハ此外もけくありか人と懐中を搜し
 又々ハ洞お巻られ打違ひあり儲とも爰お躲しありく意出

せむ取携りて此金を奪つれくハ予身も後へも前へも行か
 ざり誠死せんより外ハしきりなつて申も金あることハこれ
 一うハ饒したすめはド困く此黄金と列位ハ度しづん
 今より足下等の執成めて首領自來也大人お相目しめ
 予をも屬賊となすてあられし命替りれ此金と渡らん
 明日より路道お迷ふ此身ひとし列位を憑こたれハ只賤隣
 へ無道多くと歎くあぞ衆皆うち笑ひ膝ごとく腰のしを
 我ハ仲間お入とて物のお用も立まじけれと首領自來也
 と強惡と働げいも復寛仁大度の志あれと斯く言ふ
 棄なく用のお處もあらんぞとれも今より我くふ行ふ

事^ミズー^{ヒク}一^ツふハ首領^{カウラ}の魁^{アキ}とみもなるべし痴漢^{シカン}なりと^イ又^マハ
金子^{カネ}ハ不^フ残^{ゼン}奪^{ダク}ひ取り小賊^{コタク}等^トと公^{コウ}汝^ニ鏡^{カガミ}一^ツ張^テ助^{タシ}ハ
ひく^{ヒク}之^ノ浦^{ウラ}の沖^{ミナト}へぞ立^タ帰^カれ

自來也説話後編卷之二

三浦沖エゾ

立帰ル

三浦大助百六

